

加正類

平民苗字ノ儀ニ付御問合ノ趣了承右ハ庚午年明許ノ御布告ニ據ッテ苗字相用候モ不相用モノモ有之故ニ實際取調方ニ於テモ素ヨリ右ノ如ク勝手ニ任セ有之候依テ及御回答候也
陸軍 一月廿四日

左院議按 内務課主査

別紙陸軍省伺四民一般苗字相用候儀更ニ御布告ニ相成度趣審議候処庚午年ノ御布告ハ従前ノ禁例ヲ解キ候ノミニテ今后平民苗字相用候モ不相用モ亦各自ノ勝手ニ有之候ハ取調ニ於テ不都合ノ儀モ可有之儀ニ付伺ノ通御聞届相成可然存候依テ左按取調此段上陳候也
陸軍 一月廿九日

四十二

三月十七日 九年

婦妻苗字ハ所生ノ氏ヲ用ヒ夫家ヲ相續スレバ該家ノ氏ヲ稱ス

内務省伺

婦女ノ輩一般姓氏ヲ冒シ候儀不苦候哉御許可ニ於テハ左ノ廉ル相伺度今茲ニ大内家ニテ里見家ノ女花ナルモノノ囉ヒ受ケ養女トナスルハ直チニ大内ノ貴ヒ受ケ妻ト為ストキハ大内某妻里見花ト唱ヘ夫ノ姓氏大内ヲ冒サス此類例和漢ノ書籍ニ許多有之逐次枚擧ニ違アラヌ又大内某 前條ニ云フ 死太シ嗣子ナク不得止妻花ナルモノ夫ノ家督相續シ戸主トナルハ實家里見氏ヲ稱セス直チニ夫ノ姓氏ヲ

此同及指合案共
廢案ニ屬スルモノナリ
當サニ移シテ後ノ伺指
合ノ後ニハルニ編若
誤リトス
十八年十二月十五日正ス

廿九

四十二 然效類典

襲ヒ大内花ト改称ス

右ニケ條ノ法今昔凡用ヒ來リ習慣ニ相成居候然ル
ニ他ヨリ嫁シ來タル妻タル者ノミ獨リ實家ノ姓氏
ヲ用ヒ衣服調度ニ至ルマテ都テ家ノ徽章ヲ相用候
者間有之習慣然ルニ養子養女トナルモノハ直チニ
其養家ノ姓氏ノ肩セルハ全ク養ヒ子トナルト妻ト
ナルトノ輕重ニ候哉右等ノ推衡何出候際ニ有之漢
土法ニ據レハ可然哉ニ相考候ヘトモ皇國ノ法制ニ
於テハ如何可有之哉佛蘭西民法ニハ養子ノ若己レ
ノ姓ト養親ノ姓トヲ帶用ストアリテ其實際施為ニ
至テハ辨知不致依テ前陳區々ノ議論夫兼候間及上
陳候至急何分ノ御指揮被下度也七年八月二十日
白卷

左院議案 法制課主査

別紙内務省伺婦女姓氏ヲ肩シ候儀審議候原養女ト
妻トハ輕重ニ因テ推衡ヲ異ニスルニ非ス養女即養
子ト養子ト同一ノ權アリテ其家ヲ繼嗣スル者也妻
ハ配偶ナリ配偶シテ其夫ヲ助クル者ニシテ一己ヲ
以テ其家ヲ繼嗣スル者ニ非ス此原則ニ於テ異アル
所以ナリ且佛蘭西ノ養子法ハ實方養方共財産ノ分
派ヲ受故ニ姓氏ヲ帶用スルノ理アリト雖日本邦ニ
於テハ前段ノ原則ニ因リ中古以來人ノ妻タル者本
生ノ姓氏ヲ稱スル習慣有之候ヘレ現今ノ御制度ニ
於テ妻ハ夫ノ身分ニ從ヒ貴賤スヘキ道理ニ據リ夫
ノ姓氏ヲ用ル方相當ト存候依テ御指令來調査供高
裁候也七年九月四日
内務

御指令按

大政預典

第一條 伺之通

第二條 本邦ニ於テ中古以來人ノ妻タル者本生ノ姓氏ヲ稱スル習慣有之候ヘ共現今ノ御制度ニ於テ妻ハ夫ノ身分ニ從ヒ貴賤スヘキ者ニ付夫ノ姓氏ヲ用ル儀ト可相心得候事

第三條 伺之通

參照

第一 養女ハ養家ノ姓氏ヲ冒ス

大寶戸令ニ云凡無子者。聽養四等以上親於照穆合者即經本屬除附

右ハ男子ノ養ハル者其本屬ヲ除テ養家ノ屬ニ付スルヲ云テ女子モ亦之ニ准スヘシ

女院小傳ニ云今出河院藤喜子母太相國實基女藤教

子實大外記師朝女師朝ハ中原氏ナリ

史略ニ云土御門天皇母源氏内大臣通親養女法印能圓乃生

彌承明門院能圓ハ藤原氏ナリ即此類

第二 妻ハ乃生ノ姓氏ヲ用ユ

中古歌仙傳ニ云赤染右衛門前大隅守赤染時用女式部大輔大江匡衡朝臣為妻

江記ニ云赤染ハ赤染時用女也依歷右衛門志尉彌赤染右衛門ノ類

第三 夫ノ家督ヲ相續シタル女ノ主夫ノ姓氏ヲ襲フ男子ノ相續人共相續スル家ノ姓氏ヲ襲フ

右類推スレハ婦女モ亦令シ養子養女ノ條ト一月遺妻故夫ノ家相續ノ辭令書式

里 見 花

故大内基跡相續被仰付候事

右ノ辭令書ヲ受シ日・リ初テ大内家ノ姓ヲ冒スヘ
キ理ナリ

内務省伺

華士族平氏ニ論ナク凡テ婦女也ノ家ニ婚嫁シテ後
ハ終身其婦女實家ノ苗字ヲ稱ス可キ儀ニ候哉又ハ
婦女ハ終テ夫ノ身分ニ從フ筈ノモノ故婚嫁シタル
後ハ婿養子同一ニ者做シ夫家ノ苗字ヲ終身稱ヘサ
セ候方穩當ト相考ヘ候ヘ共右ハ未タ成例コトナキ
事項ニ付夫シ兼候ニ付仰上裁候至急何分ノ御指令
被下度此段相伺候也八年十一月九日
伺ノ趣婦女人ニ嫁スルモ仍ホ所生ノ氏ヲ用ユ可キ
事

但夫ノ家ヲ相續シタル上ハ夫家ノ氏ヲ稱スヘキ
事 三月十七日

法制局議案 大史歴查

別紙内務省伺嫁女性氏ノ儀審案候嫁婦女人ニ嫁シ
タル者夫家ノ苗字ヲ稱スルト不可ナル者三ツアリ
第一 妻ハ夫ノ身分ニ從フヲ以テ夫ノ姓ヲ冒サシ
ムヘント云ハ是レ姓氏ト身分トヲ混合スルナリ
第二 皇后藤原氏トランニ皇后ヲ王氏トスルハ甚
タ不可ナリ皇后ヲ皇族部中ニ入ルハ王氏タルヲ
以テノ故ニアラスシテ皇后タルヲ以テナリ
第三 今ニシテ俄カニ妻ハ夫ノ姓ニ從フトスレハ
歴史ノ沿革實ニ小事ニアラス例ヘハ何々天皇ハ何
々天皇ノ弟幾子母ハ皇后王氏ト署セントスル欵

加
此
類
冊

婦スル處今別ニ此制ヲ立テント欲スルヲ以テ一ノ
大因難ヲ醸スナリ右等ハ都テ慣法ニ從ヒ別ニ制ヲ
設ケサル方可然故因テ御指合案左ニ仰高裁候也
二月五日

二月五日 六年

第三十六号

自今年齡ヲ計算候儀幾年幾月ト可相數事

但舊曆中ノ儀ハ一千支ヲ以テ一年トシ其生年ノ月
數ハ本年ノ月數ト通算シ十二月ヲ以テ一年ト可

致事

司法省伺

年齢ヲ計算候儀幾年幾月ト可相數旨御布告相成候
處無宿罪囚等生月ヲ不知者多少有之右等ハ年ノミ
計算致度此段相伺候也
二月十九日
二月十二日
司法

司法省届

今般年齢ヲ計算候儀幾年幾月ト可相數旨御布告相

三十

大
政
預
典